



新村出全集

第六卷

筑摩書房

新村出全集第六卷

昭和四十八年一月三十日 第一刷発行
昭和五十二年五月三十日 第二刷発行

著 者 新 村 出

担当編者 重 久 篤 太 郎

発行者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一九一

電話 東京 〇七六五一(代表)

振替 東京六一四一二三番

印刷 多田印刷株式会社

製本 矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

南蠻紅毛篇Ⅱ 目次

南蠻広記抄

序文 7

〔西教篇〕 足利学校の盛時と西教宣伝 12 安土桃山時代の天主教教育 21

南蠻寺の遺鐘 33 京都南蠻寺興廃考 35 慶長年間の京都耶蘇信徒の墓

碑 45 徳川初期に於ける仏徒の耶教排撃 50 徳川幕府の耶教禁圧と儒

者 58 林道春及び松永貞徳と耶蘇会者不干ハビアン 70 〔典籍篇〕 南

蠻録 78 摂津高槻在東氏所蔵の吉利支丹抄物 89 〔藝術篇〕 西洋画伝

来の起源 116 摂津高槻在東氏所蔵の吉利支丹遺物 126 南蠻画屏風解説 140

和蘭伝来の洋画 142 洋画史談 155 更紗の名義 161 更紗の語源―森鷗外

博士の追懐― 175

続南蠻広記抄

序文 181

〔洋学篇〕 北島見信の『紅毛天地二図贅説』 190 青木昆陽伝補訂 195 平

沢元愷の長崎松前漫遊	204	天明時代の海外智識	213	阿蘭陀正月	247	蘭
書訳局の創設	252	本邦英語学史話	266	〔海槎篇〕		日本南国関係史料補
遺	272	暹羅の日本町	281	伊勢漂流の事蹟	295	太平洋の捕鯨船と日本
の開国	323	〔鎖国篇〕		県居翁と異国趣味	334	乙丑の新春に屋代輪池が
詠める異国情調の歌	336	百年前の歐洲大戦乱と鎖国時代の日本	340	〔情		
趣篇〕		堺港の異国情致―堺港と歐洲人―	350	南蠻画屏風の感興	373	〔洋
人郊外遊楽図〕の小屏風	377	海の星	383			

日本吉利支丹文化史

391

序文

393

序説	397	第一章	吉利支丹伝道史の概観	405	第二章	吉利支丹の文化
----	-----	-----	------------	-----	-----	---------

事業	428	第三章	吉利支丹版	463	第四章	吉利支丹文学
----	-----	-----	-------	-----	-----	--------

章	吉利支丹學術の伝来とその研究	518	結語	539	参考文献目録	542
---	----------------	-----	----	-----	--------	-----

日本吉利支丹文化史	547	吉利支丹文学概説	555	吉利支丹文学史序説	560
-----------	-----	----------	-----	-----------	-----

解説		重久篤太郎
----	-------	-------

571

新村出全集 第六卷 南蠻紅毛篇Ⅱ

南蠻広記抄

序 文

こたび『南蠻記』以後に成れる外来文物に関する論考異国趣味に因める述作若干篇を主として一書を成さむと欲し試みに題名を詮索せしころ、東都にありて春宵を二三の旧友と共に過しし時、偶々談これに及び、われ、「広南蠻記」といふ名はいかゞあらむなど言ひけるに、一友のむしろ「南蠻広記」とするかた好からむと勧むるあり。すなはちわが意これに決しぬ。数年前のことなりしが、『南蠻記』といへる書名を、『本草綱目』の序例中に著録せるを見て、いつ何人の手に成りしかは知らねど、漢土既にこの書名ありけるかと苦笑せしことありき。今宋初の名著に『太平広記』あるに對して此の新題いとおもしろしと思へり。

顧みるにわれ十年このかた夢魂なほ海のあなたに漂ひ、黒船に縁が尽くる期なく、紅毛に深き思ひつながら、邪宗の門に蘭学の庭に出入度なく、波斯の織物印度の縞柄、或はゴブランに執着しては掛毛氈タペトリの源流を究めんと欲し、更紗模様モリモノに憧れてはその語源を尋ねんと願ひ、さて又珍陀ジンタの古酒の酔ひごゝち、嗔チヤ吶ナのねにひかされて耶悉茗ヤスミンの香をかぎつゝ、とざまかうざまにひたすら南へとさまよひありけり。世この老ミニョンをいかに見けむ。

かくてこゝ十年間の論著に加ふるに旧『南蠻記』中の若干篇を以てし類に従ひて次第して此の一書を編むを得たり。其の冊今こゝに装ひ成りて世に見えむとするに方りて、装幀に意を致されし平福百穂画伯、名づけ親にも擬すべき畏友山田孝雄君、校正に心を尽くされし和田勇氏等岩波書店の諸員に對して感謝の意を表すると共に、世に先んじてわが往年の南蠻研究の成果を夙くも江湖に薦められし旧東亜堂主人伊東芳次郎君の雅懷を録することを忘る

る能はざるなり。

大正十四年七月二十八日

『南蠻記』に序せしと同じ月日に

新
村
出

例 言

一 本書は「西教」「典籍」「藝術」の三篇に分ち類似の論文どもを毎篇下に輯めたれども、元と各論文は其間何等連絡あるにあらざるは勿論、いづれも多少時を異にして述作したるものなれば所説屢々重複し往々互に扞格あるを免れず。又旧稿中には今日の智識を以て補訂を要すべきもの多しとなす。然りと雖も一々改訂補修を加へむには延いて全文の論調筆致を傷ふものあるべきを憂へ殆ど修訂を加へずして之を印行に附せり。是れ著者の甚だ遺憾とする所にして、以て識者の毀りを甘受すとも、之によつて大方の読者を誤らむことを恐るゝや大なり。他日別に技勘補遺の一文を附して統合を図らむことを期す。

一 西洋の名称の写音法にも前後小異なしとせず。又原名既に相通じて用ゐられたる二様の綴字を併存したるが如き例もあり。バジエス (Basis) を旧来誤用の発音のままにバジエーとしたるも、当年の体裁を崩すまじとせる我見に出づるのみ。但し曾て Esopo をエソポと書きたりしを古例に従ひてインポと改めたるが如き例外なきにあらず。

一 挿画は新陳相交れり。今略解を附すること左の如し。第一の「西教篇」の首に掲ぐる所のシャギエル上人の画像は北摂山間の吉利支丹遺徒の伝へしものにして、いま同地東藤次郎氏の所蔵なり。第三篇の第二文に詳説あり。次に載する所の、或港町の南蠻寺門前は、但馬河本重利氏の所有にかゝり今京都帝国大学に寄托せらるゝ六曲一双の南蠻船屏風の一細部を取れるものなり。原画は出色の作品にして狩野内膳の落款あり。また所謂京都南蠻寺遺鐘なるものの伝来につきては近来異説を容るべき新資料出でたれど今こゝに記すの違なし。この古鐘のこと第一篇第四文に略述せる所あり、目新しきものにはあらざれど、原拓より取りたる文様など趣を添ふるに足るべし。

一 第二の「典籍篇」に挿みたところの『天草版平家物語』及び『落葉集』の巻首の写真につきましては本文に細説あり。後者は『破提字子』古刊本の写真と共に従来世に出でざりしものとす。著者ハビアン的事蹟につきましては第一篇第九文第二篇第二文第五文等を見るべし。

一 第三の「藝術篇」にありては支倉常長の画像平賀鳩溪の西洋美人画共に有名なるものなればこゝに贅せず。鳩溪の洋画につきては第四文に悉くせり。江州長浜町八幡祭山車見返しの所謂ゴブラン織は写真類にて人々の熟知せる所、構図奇古にして、表現せる光景は恰も『アラビヤ物語』に出でたらむ趣あり。今本文に詳説を闕く。更紗の標本には故らに天明版の『更紗図譜』に載する所の「音呼手^{いんこて}」を以てす。南方の色彩濃厚なりとせむか。同書に出づる「象唐花^{さうたうばな}」の一図は、本書の姉妹篇たる『南蠻更紗』の装幀図案に用ゐしことありき。

西 教 篇

西教の弘布と禁制

足利学校の盛時と西教宣伝

一

足利学校が其の学風を以て日本の文教界に重きを成したのは、戦国時代までであつて、天正十九年豊臣秀次が東征の時に於て、書籍什器を取むると共に庠主三要をも随へ来り、上国の文運に資するの機を作つた以来といふものは、学校は単に関東の一郷校たるに過ぎざる有様に成下ると共に、之に反して珍籍の秘庫としての価値が、徳川時代を通じて益々高まり、其盛名は明治大正の近時にまでも失はれないやうになつた。一言すれば徳川時代文運興隆の以前までは、足利学校は学校としての価値が十分であつたのが、その以後に至つては、文庫即ち学校附属図書館としての資格しか日本の学术界には保たれないやうになつたと云つてよいのである。

徳川氏の初期に於て既に堀杏庵林羅山の如き鴻儒が足利学校を訪ねたことがあり、貞享年間には貝原益軒の如き教育家が立寄つたことなどもあつて、その中羅山は文庫所蔵の五經註疏に注目したこともあるけれども、蔵書が学者や好書家の間に知られて、研究家の訪書を促し考証家の校勘に資するやうになつたのは徳川中期以降の事柄である。即ち宝永年中中村富平の『辨疑書目録』^(八卷)に足利本書目三十九部を著録したのが、蓋し江戸の学者を刺戟した原由ではなかつたかと思ふ。続いて享保年間山井、根本物門の両儒が足利に至りて、二人協同して『七經孟子』を校勘し、一人は皇侃の『論語義疏』を謄写して歸つた。『七經孟子考文補遺』は幕府の儒員荻生観が命によつて

編輯して享保十六年に出版し、『論語義疏』は寛延三年撰文、服部南郭の序を以て刊行された。その外享保十七年太宰春台が出版した『古文孝経』も足利本に拠つたものであつた。後年安永天明年間、清朝の乾隆四十年代に至つて、『古文孝経』が漢土に渡つて、『知不足齋叢書』に収めて刊行され、『七経孟子考文補遺』が『四庫全書』に編入されるやうな勢で、足利学校の文庫は爾来支那本土にも喧伝されることとなつた。天明寛政以降、足利本の名益々我国の学界に高きと共に、寛政の末足利学校所伝文明年中の影鈔本によつた『泰軒易伝』が林述斎の『佚存叢書』第二帙に収めて活刷され、降つて弘化の末足利本を以て松崎慊堂が写した『影宋本尚書正義』が熊本藩から出版されたやうな複製事業が起つた。後者は出版の翌年長崎から支那に輸出された。前者も叢書全体と共に彼土に伝はつたに違ひない。かくて足利文庫は明治以後に至つては、人も知る如く楊守敬黎庶昌の如き好書家を引きつけ逸書百篇今尚ほ存することの偽りならざることを支那人に愈々深く知らしめた。

斯くの如く足利学校は、学校として既に生命を失つてゐた徳川時代の後期以来その貴重な文庫によつて支那の学者間に響きわたるやうになつたが、之に反して講学所としての活力最も旺盛であつた戦国時代に於ては、当時日本に弘布を始めつゝあつた南蠻吉利支丹の宣教師によつて、事実以上の価値を認められて本国に報告され、布教史に載録され、歐洲の大学や学院に比せらるゝの榮譽を有したのである。この事は、世の足利学校を攻究する者に見逃がされてゐるやうであるから、一異聞として茲に紹介するのであるが、蓋し同校講学の影響の及ぶ所としては、特筆大書すべきことではないかと思ふ。且つ遠西の宣教師は足利学校に過大の価値を置いたから、その出身者を聘用して、西教宣伝に資することを企てた形蹟もあるのである。以下それらの事を叙述して見よう。

足利学校の事が宣教師に知られたのは、耶穌教渡来の劈頭からである。而も聖シャギエル上人が鹿児島に到着後初めて発した日本第一通信に見えてゐる。今コールリツヂの英訳本にて『シャギエル書簡集』第二冊（一八七六年第一版による）を繰ぐに第五卷第一章中に見ゆる第七十九信が、上人の日本よりの第一信であつて、それは西紀一五四九年十一月五日、又は十一日、天文十八年己酉十月六日又は十二日鹿児島発、印度臥亜の耶穌会へ宛てたものである。但し其の鹿児島来着は同年陽曆八月十五日陰曆七月十二日のことであつた。さて右の書信の一節（二七頁）の略に云く、

京都には有名な一の大学あり、尚又五つの主要なる学林と二百有余の僧院とあり、……京都の大学の外、日本には其他の五ヶ所に主なる学院存すコーヤ（高野）ネグ（根来）ヒソ（比叡山）及びオーミヤ（近江、恐くは、三井寺ならん）この四つは京都の周囲に互に相近く位し、各三千五百の学徒を有す、これらの外、坂東の学院あり、日本国中最も大にして最も有名なり、而も京都を距ること甚だ遠し、坂東は一大領土にして、六人の小主之に割拠し、その中一人最も勢力あり、……

右に云へる坂東の学院とは、足利学校であらうと思ふ。京都の一大学五学林とは何々を指すか。恐くは五山などの禅刹を称するものに違ひない。通信文にはなほつゞけて学院のことを書いてある。二五九頁に云く、

明年（一五五〇年）中には、京都の事情や諸大学の事や耶教關係の報道を詳細に書送らん、本年印度に渡航して我が教の秘奥を学ばんとする日本人のうち、京都及び坂東の大学にて教育を受けたる二人の僧侶あり、

この二僧のことは、シャギエルの別信に屢々見え、又布教史にも録せられてをるが、今はそれは後に譲り、足利学校の位置に関する上人の記載と、それに伴ふ上人の注文とを報告しよう。

『書簡集』第五卷第三章中なる第八十六信は、上人が印度のコチンより歐洲の耶穌会へ宛てたもので一五五二年正月二十九日、天文二十年十二月二十五日附であるが、その中に云ふ（第二冊三、四五頁）、

坂東の大学は、日本の一島に在り、……諸大学中最も有名なり、多数の僧侶その教法を学ばんとて絶えずか